別添資料:新聞記事一覧

※記事内容については、引用者が一部変更したところがあります。

No.	掲載紙名	発行日	曜日	地域版名	面	記事タイトル	記事内容	備　考
①	産経新聞	1959(S34).04.14	火	武蔵野版 ※1	12面	町を明るく美しく　新趣向の街路灯二題 国立では彫刻入り　空飛ぶ円盤型水銀灯 立川	街路灯を通じて町を明るく、美しくしようという話題二つ。一つは北郡国立町大学通り商店街の日本でも初めてといわれる彫刻による街路灯計画といま一つは立川市南口商店街の空飛ぶ円盤型新デザインの水銀灯 その一　中央線国立駅南ロロータリーから南へ延びる通称大学通りに街路灯設置運動が起きたのは三十二年秋のこと。大学通り商店街三十店が中心になって昨年末ようやく〝文教地区国立のメインストリートにふさわしいもの〟ということで彫刻による街路灯設置案がまとまり、デザイン完成をまって近く着手することになった。 同道路は幅員三十二・三㍍という戦前は札幌の大通りに比較されたほどの大通りだが、通りに面して一橋大学があり立木がこんもり茂って夜間婦女子の一人歩きは危なく、最近では都立五商の夜間生は避けて通るほどで、このため防犯の意味もかねて街路灯の設置がいそがれていた。 計画によるとロータリーぎわから一橋大学まで四百五十㍍の間に左右十二か所二十四個の街路灯を設置しようというもので、街路灯二㍍の台座の上に裸像などの彫刻を置き、その上に螢光灯をつけることになっている。材料は費用の点でセメントが使われるはずで、あるところでは手の上に火がともり、また頭の上に火がともるというところもあり画期的なもの。 すでに画家伊藤接さん(四一)のあっせんで国立在住の今城国忠、中村博直、大国丈夫、岡[関:引用者]保寿、関敏、江口週など日展系新制作派などに属する彫刻家が制作に当ることになっており、完成後のできばえが期待されている。 (以下略)	※1:くにたち図書館が収集した地方版は多摩版かとみられますが、武蔵野市中央図書館が所蔵する武蔵野版で確認した記事内容を掲示しています。
②	東京新聞	1959(S34).08.28	金	都下版	8面	国立「大学通り」に新名所 生れる〝彫刻街灯〟　街の芸術家が協力して	中央線国立駅南口駅前を真南に走る一橋大学通りは文教地区の中心。この落ちついたイチョウ並木をより芸術的なもので飾ろうという地元民や街の芸術家の協力で、九月から動物やさまざまの彫刻をとりつけた街路灯を建てることになり、いまその準備が進められている。 大学通り建築委員会(高田登会長 会員四十五人)が生みの親で、同会ではかねてから大学通りにふさわしい芸術的なデザインを考え、計画を進めてきたが、これを聞いた町内在住の新進彫刻家関保寿さん、敏さん兄弟と岡正敏さん、江口週さんで、いずれも日展系、三人展同人のグループが協力を申し出た。 秋の美術シーズンを迎えて忙しい同町中区のアトリエでいま四人はセメント彫刻の製作に懸命に取り組んでいるが、自分たちの住む町を少しでも美しくし、また彫刻というものを実際に街頭に出して各層の人に見てもらうことは、展覧会に出品するより意義があると思い、仕事を買って出たという。 建築委ではこの計画をたてるさい、文教の町という特別な環境を生かすため普通の街路灯は避けたいと考えていたところ幸い前記の四氏が全面的に協力を申し出てくれたのでさっそく依頼した。 すでに支柱二十四本はできており、彫刻の完成する九月中ごろ駅前から一橋大正門までが取りつけられる予定。今後も予算の許すかぎり次々と街灯をふやして国立町の名所にするということで、新学期に入って明るいけい光灯に彫刻が浮き出され、秋の夜をいろどる日も近い。 高田会長の話　多くの人の協力で立派なものができるので大変うれしい。彫刻街灯には一本一本ペットネームを一般から募り国立町の名物として育てていきたい。	
③	読売新聞	1959(S34).09.24	土	不明 ※2	不明 ※2	陣馬山	国立町大学通りを文教地区にふさわしいものにしようという計画が同建設委員会(会長 高田登氏)ではじめられ、両道に街路灯二十四基を設置する工事が去る六月から行われていたが、来る二十七日その除幕式が行われる。 同街路灯には同町在住の新進彫刻家関保寿さんら五人の作品が支柱につかわれるもので、散歩道にふさわしいものができるでしょうと関係者を喜ばせている。	※2:国立国会図書館が所蔵する同日付の読売新聞を確認しましたが、くにたち図書館が収集した記事を検出できませんでした。
④	毎日新聞	1959(S34).10.06	火	都下毎日	12面	国立駅前に新名物 彫刻街路灯がお目見え	中央線国立駅前から一橋大学までの両側の舗道に彫刻を飾った街路灯が出来上り、五日除幕された。これは同駅前通りの商店会と同町に住む彫刻家の有志が協力して少しでも美しい町にしようと作ったもの。 街路灯は八百㍍の舗道の両側に全部で二十四本。関保寿、関敏、岡正敏、江口週氏の四人の彫刻家が刻んだセメント像が全部取りつけられている。同大学通り建設委員会では一本、一本の街路灯の名称を町民から募っているが、夜は青白い灯に子を抱いた母の像やニワトリ、フクロウ、馬の彫刻が浮き上り、大学通りというアカデミックなふんい気に和して国立町の新しい名物になろうと関係者はいっている。	
⑤	読売新聞 ※3	1959(S34).10.06	火	三多摩読売	12面	人物・動物つきの街路灯 国立 彫刻家四人の奉仕で生れる	一橋大、音大をはじめ都立五商高高[都立五商高:引用者]、同国立高、桐朋高など多くの学校をもち三多摩の文教地区といわれる北郡国立町は国電国立駅南口から一橋大にいたるイチョウ並木通りの環境をより明るく、美しく浄化しようと去る七月国立町大学通り建設委員会(会長高田重氏)を設け、単なる街路灯でなく、〝文教の町〟にふさわしい芸術的なデザインと感覚をもった彫刻つきの街路灯を建設中であったが、このほど二十四基が完成し、五日正午から祝賀をかねて除幕式が行なわれた。 この彫刻は同市に在住する関保寿さん(四〇)敏さん(二九)兄弟と岡正敏さん(四六)江口週さん(二七)の彫刻家有志四人の手で二か月にわたって作奉仕的に製されたもので[「奉仕的に作製された」カ:引用者]、高さ一㍍三十の街路灯台石に取りつけられている。作品はセメントで人物、動物を抽象的に刻まれており、まだ名前はないので、八日までに一般町民の投票を求め、作者のアイデアに最も近い愛称をつけることになっているが、けい光灯の街路灯に様々な形の彫刻が組合せられたことはモダンのなかにも落ちついたふんい気をかもし出しており、朝夕の通勤通学者や町民から親しまれるのもそう遠くはないと見られている。	※3:くにたち図書館の収集した記事にはなく、関敏氏所蔵アルバムに貼付された記事から検出したもの。
⑥	朝日新聞	1959(S34).10.16	金	都下版	13面	街灯柱の彫刻に名前 国立町 明るい町づくり懇談会	国立町の表玄関に当る中央線国立駅から、一橋大に通ずる両側舗道の街路灯に美しい二十四個の彫刻が飾ってある。これは駅前通りの商店会で金を出し合い、町民の彫刻家四氏の協力を得てこしらえたもの。そこで同商店街ではこの力作に一つずつ名前をつけようと一般から募った結果、立派な題名が集まったので、十七日、協力した彫刻家関保寿、関敏、江口週、岡正敏の四氏と、当選者を招いて明るい町づくりの懇談会を開く。 題名の応募者は八百人をこえるという盛況で、その中から力作とぴったりする〝横たわる人〟〝もだえ〟〝森の番人〟などが選ばれた。秋風に乗って道路わきのイチョウの葉が彫刻に舞い散る風景は深みゆく秋をしのばせ歩行者たちをたのしませている。	